

していたものの、くしくも妻子と再会し、昭和二十一年八月二十三日、一千人の引揚者の隊長となつて、食うや食わずの丸裸であるが、たった一千円の所持を許されてコロ島から乗船、現在地の山代町久原の我が家に引き揚げてくれた。その後、両親、苦勞を共に生きて来た妻を亡くしたが、残された三人の娘をそれぞれ嫁がせた。幸いに健康に恵まれ、みんなから慕われて引揚者団体県連の代表、老人クラブ会長として活躍されている。

(出)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助

泣き夫の姿を臉に浮かべて

鹿兒島県 松元ヒナ

昭和二十年、満州国安東省鳳凰城の春三月、外ではボタン雪が舞い降りしきる杜宅の二重ガラスの窓ぎわに立っていた。三歳の輝男は一人で雪を眺めながら遊

んでいた。私と夫は朝食、ささやかながらも我が家は幸せだった。輝男にふと目をやれば、オシッコを垂らしている。「輝男ちゃん、オシッコしたの」「これ母ちゃん、ヨダレよ」三歳の子でも恥ずかしかったのか、オシッコじゃない、ヨダレよと片言で返事をしているのです。私は主人と顔見合せて笑いました。こんなかわいい子を産めた母となれば喜びです。戦はあつても、直接我が身に迫らない。それでも絶えず緊張している毎日でした。勤務時間になり出されたのか、鳳凰城郵便局の横では、主人も近ごろよく鉄砲持つて戦のけいこをしていました。両手で鉄砲を上にあげて、背なでにじりよる。あれは「匍匐前進」というものだと、あとで主人が教えてくれました。いよいよただならぬ気配、戦はすぐそこまで迫っていました。

「おいおい、長期出張だぞ」「また、だれか代わりにの独身男性はいないの」、すると「これだよ」主人が見せてくれたのは、初めて見る赤紙召集令状でした。終戦間近い二十年五月の朝です。そのころ身障者でない限り、男という男は皆召集されて行きました。私の

胸にふつと不吉なものがよぎりました。いいや勝たねばならない。かねて覚悟はしていたものの、現実によつてきた夫との生き別れです。私は輝男をひしと抱きしめました。今宵限りの別れの晩餐です。泣くまい、涙みせたら非国民、じつとこらえていましたが、お腕に涙がぼろぼろ落ちました。みせたらいけないと思つていた涙です。「あら、私の目から雨も降らんのに雨が降る」わざと笑つてみせました。一夜明けて夫は、満州のアカシア並木を振り返り、笑つて戦場へ、北滿へ發つて行きました。奉公袋を上着の下に隠しながら、辺りをはばかりようにそそくさと出て行きました。こゝは外地、外地にいたらスパイの目もさげねばならなかつたのです。万歳の一声もなく、それは寂しいものでした。アカシア並木の影からふり返つたあの日の姿は、私のまぶたに焼きつき、いつになつても年をとつてくれません。主人の面影はいつまでも若いのです。「おい駅へ送つてきたらいけないぞ。憲兵がうるさいからね」でも私は一目、この子に父の姿を見せたかつたのです。「おいおい輝男、父ちゃんは行つてくるか

らね。お前母ちゃんと仲良くしなさいよ。父ちゃんはお前が学校に行くころ、帰つてくるからね」、眠つている背中の子をなでさすりながら、独りで語つて發つたこの子の父親でした。あれだけかわいがつていた我が子輝男。これがこの世の見納めになるかもしれないのです。私は駅へ急ぎ、遠くから貨物列車の中にあるであろう夫を探しました。その入口に仁王立ちになつてはるかな社宅をじつと見つめている夫の姿を見つけたのです。私はさかんに目で合図しましたが、我が家の社宅のみ見詰めています。きつと妻子のいる我が家へ思いをさせていたのでしょうか。間もなくゴトンゴトンと動き出す貨物列車。だれかが教えてくれたのか、最後にこちらをじつと見ていてくれました。これで無言の別れ、見送りができたのです。

あの家もこの家も最愛の主人を召集されてしまつて、それでも氣強く生きねばなりません。戦況はどうなるのか、私らの満州での生活は、不安な思いの明け暮れでした。張りのある生活、ささやかな幸せ、あれもこれもぶつ切り切れて、私はだだっ広い社宅にある畑で

輝男を抱き、思い切り泣きました。ここならだれもみていない。泣いても恥ずかしくないのです。我が子の後姿、歩く姿は主人そっくり、輝男を私はひと抱きしめほぼほりしました。涙も涸れはてて帰る母子のうしろに、満州の夕日は真つ赤に燃えていました。

それからは、近くの神社にお参りの毎日でした。「父ちゃん、元気で早く帰ってね」モミジみたいな手を合わせて、私の真似をしている輝男です、鳳凰神社の境内、そこにはすみれの花も咲いていて、遠いはるかかな日本を思いました。近くの駅では、北満からの若い兵が南方へ南方へと急いで行くかに見えました。もしかしたらこの子の父親に会えるかもしれない。輝男を抱いて、昨日も今日も、列車の中の南へ下る兵隊さんをして、昨日も毎日でした。列車の中には竹の筒つぼが、水筒代わりに下げてありました。ああ、もう日本もここまできているんだ。水筒代わりの竹の筒つぼ、私は不安な思いにかられました。主人の職場だった「満州葉たばこ会社」には、どこからか移動してきた日本の兵がたくさんいました。

昭和二十年八月十五日です。「奥さん重大放送聞かれましたか、天皇陛下の：」「いいえ何かあったんですか」「日本は負けたんです」「まさか、デマでしょう」「いいえ負けたんです」皆は鉄砲もったまま。腰かけたままの姿で頭をかかえています。近くの杜宅の奥さんは私を見るなり飛んで来て、「奥さん、日本は負けたんです。残念でした」と抱きついたまま、ワアワアと泣かれるのです。不思議に私は涙もそう出ませんでした。ついこの前の五月に応召したばかりの主人の身を案じながら、毎日不安な思いでした。

終戦、連日、ソ連軍、そして八路の略奪です。土足のまま天井裏まで目ぼしいものを探していきます。「お前らは負けたんだぞ。日本はなくなつたんだ。天皇は追い出され宮城にはマッカーサーが入っているんだ。城内に行ってみろ。万国旗がはためいているけれど、日本の旗はないんだぞ」、私は輝男をおぶって日本の旗を見に行きました。いくら探しても日の丸がないのです。涙が出て、泣けてきました。電信も交通もすべてがとどえた満州に、ただ戦戦競競せんせんきょうきょうとして生きられ

るだけ生きねばならないのです。ある日、外で遊んでいた輝男が、いきなり我が家へ駆けこんできて、「母ちゃん日本は負けたの?」「何言うてるの輝男ちゃん、日本は勝ったんだよ」幼い子を傷つけまい、やがて負けた日本の本当の話をしてあげよう。「母ちゃん日本の飛行機ないね」、首をかき上げて不思議そうに空を見上げていました。

終戦の日から何日か、過ぎたころでした。我が家の裏にガヤガヤと人声がします。日々人殺しの宣伝にそのき、明け暮れていましたので、私は恐る恐る外へ出てみました。それは日本の敗戦兵でした。「奥さん、私たちは山から下りてきました。この鳳凰城の町の日本人が殺られやしないかと、見張りにきたのです。まだまだこれがありますからね」一人の兵が、武装解除されていらない菊の紋章入りの鉄砲をさすつて笑いました。「ソ連兵が今に日本人狩りにやってきました。ありがたいですけれど早く逃げてください」そう言い残して私は感激に鼻をすすり上げながら、社宅を回って歩きました。「今日まで私たちを守ってくれた兵隊さん

を見殺しにできないの。ポロの服をくださらない。変装させて逃がしてやりましょうよ」奥さんたちはしぶぶながら、御主人の古服を出してくれました。有り合わせの食べ物で腹ごしらえをした変装兵が約十人、さえた月明かりの下に整列しました。「命あつたら日本でお目にかかりましょう。私らは、北海道の部隊です」言葉少なに彼らは、月明かりの中に遠く吸い込まれていきました。規律正しい敬礼だけを私たちの臉に残して、あわただしい別れのひととき、交わしあつたきれぎれの言葉が忘れられません。「何か兵隊さんたちの親元に書きおきを」「私は鹿児島の方です。無事に帰られましたらここへ知らせて」はりつめた表情の一人の若い兵隊が、故郷の母に走り書きしました。「母さん俺は、ときの流れに棹さす」ひたすらな思いがこめられたその紙きれも、引揚げ途中の集合場所で没収され、目の前で灰になりました。約束を果たさずじまになった若者は、生きていたら七十二、三歳でしようか。会いたいものです。

我が家のガラス窓から外を眺めていた輝男が、いき

なり叫びました。「母ちゃん、ロモーズよ」いつの間
に覺えたか、ロシア語です。ひよっと見たら、もうそ
こにつかつかとソ連兵が入ってくるのです。我が子を
おんぶして逃げる暇もないのです。「よし仕方ない。
日本の名もない妻がどうしてくれるか、見せてやる
う」私はじつと腹をすえました。綿のいっばい入った
きれいな座布団を持ち出しました。「いらつしやいま
せ」、娘時代習った小笠原流で、お行儀よく畳に顔を
すりつけました。そして「どうぞ」とお茶をすすめた
のです。皆は逃げるのに。それが面白おかしくて、ソ
連兵にあとからドンとやられた日本人もたくさんい
るのに、顔を上げたらソ連の将校らしい者が、首を横
にふっていました。「いやいや、その儀に及ばず」と
いうふうに見えます。珍しくお金もとらず、時計もと
らず悪さの一つせず、笑って出て行きました。私は今
も不思議に思うのです。あのロシアの将校は、名もな
き日本の妻に、ど肝をぬかれたというのか。日本人は
連日、次から次へ追い出されました。「お前らはぜい
たくだ。畳一枚に一人でよろしい」そんなわけで、私

らは一年に八回も家を移らねばなりませんでした。後
生大事に持っていた品物は、あれもこれも取られて、
ついには着替え一枚、鍋一つ、そんな満州での明け暮
れでした。月のこうこうとさえ渡った夜でした。越中
富山の軍人さんが同じ郷里とかで、御主人が応召、留
守中の奥さんと同居していました。ふすま一枚へだて
て私らの室です。いきなり、「ドン」と銃弾の音で
す。「やったなあー」たしかに家に入った銃弾の音で
す。硝煙の臭いが鼻をつきました。隣の奥さんが、こ
ろぶようにしてやってきました。「奥さん、こわいわ
あー、私を抱いてちょうだい」「奥さん、しつかりし
なさいよ」、抱いてあげたつもりでも私もぶるぶる、
二人抱き合っただま震えているのです。「今ね、窓の
外から八路の兵がやったのよ」、私はとっさに、同居
の兵隊さんを思いました。「兵隊さん、起きなさいよ、
女子供がこれだけこわがっているのに、何ですか、寝
たふりして」私ははらばいになって、兵の足を引つ張
りました。返事がないのです。さてはやられたなど思
い、明かりをつけてみました。びっくりです。頭はざ

くろみたいに二つに割られ、血は真つ赤に布団に流れ出ていました。一方の手は虚空をつかんだまま、こと切れていました。その横に奥さんも、息子（四歳）さんが返り血をあびたまま、すやすや眠っています。「和ちゃん、起きなさいよ」揺り起こしました。とたんに事の次第にびつくりしたのか、和ちゃんは、ワァーと泣き出し跳ね起きました。その子を私は自分のふとんに寝かせたのです。今日も明日も恐ろしい、生きた心地がしませんでした。

進駐してきたソ連兵、そして八路軍は連日、人民裁判というものをやっていました。今日も人民裁判の鐘の鳴る音です。日本人集合の場所へ急がねばなりません。そこには、日本人の一般居留民が大勢集まってきました。後ろ手にしばられ、うつむいたまま出てくる日本人がいます。警察の仕事をしていた人。役場で兵役の係だった種子田さん。満州鳳凰城合作社をやっていた沼田さん、この人は立派ないい人だった。あちらの農民のための恩人。本も著した人。いつも主人が話していた人です。いったん釈放された沼田さんは、悪

い満人に再び捕らえられ、まもなく銃殺されました。

沼田さんの銃殺のときです。「奥さん今、県公所の裏で日本人が殺されました。沼田さんという人」そっと教えてくれたのは主人と親しかった満人です。人づてに聞いた沼田さんのきれいな奥さんは、あわてて馬車に乗り県公所へ急ぎました。そこには血だらけの御主人が倒れていてまだ息があつて、奥さんが握りしめた手を握り返したとか、またそこをめぐけて、八路の兵が再びドーンととどめをさしたのです。こうしていい人は、本当に悪かった人に、連日消されていきました。

沼田さんには美しいお嬢さんがいました。これも八路の看護婦の名のもとに、どこへか連れ去られて行きました。奥さんは着替え一枚、鍋一つさげて、これも追い出されたとか、哀れな日本人の姿でした。集まった人民裁判に相手方は言いました。「この者はこうこういう罪を犯している。釈放していいか悪いか」、皆は、異口同音に「釈放」と叫びます。「よし、本日この者を釈放するが、もしや再び罪を犯したら、この部落の日本人一人残らず処刑するんだぞ、分かったな」一せ

いに「ハイ」日本人の声です。「よろしい」この人はねんねこを来た妻に綱を解かれて、皆に最敬礼して台を下りました。八路の看護婦の名のもとに、連れて行かれた、純なきれいなお嬢さんなど、本当はどうなつたことやらどうしようもないことです。ある人は言っていました。病院で八路兵のシラミとりを毎日行われていた。現に私も八路兵のシラミとりを体験したのです。よごれ服のシラミとりは、自分にもうつりそうで、それはそれは汚い胸くその悪いものでした。それでも文句の一つも言えません。敗戦国民の悲しさ、じつと耐えねばならないのです。八路兵のシラミとりもだんだん上手になつたころ、敗戦一年たてもつた満州に、ようやく待ちに待つた引揚げ命令がきました。「昭和二十一年九月十一日出発、三十分以内に用意しろ」集合場所は鳳凰城国民学校です。皆は着替え一枚、鍋一つ、ゴザ一枚しか持つていません。ある奥さんは夫の出征後、生まれた赤ん坊を前後ろに抱き、「女は弱しされど母は強し」としみじみ感じました。一夜を校庭にムシロをしいた上で過ごし、翌朝早く出発と

なりました。校庭には絶えず使いの人がきています。あの美しい、きれいなやさしい国民学校の先生は、今息をひきとられたと使いの人が言っていました。病气の人、歩けない人は注射で殺されるんじゃないかか人のうわさです。出発して間もなくの駅にきました。八十歳ぐらいのおばあさんが寝ていました。歩けないのです。この人に軍医衛生兵らしい人が注射しています。何も知らぬ私が聞いてみました。「今のは何の注射ですか」「これは今夜遅くとも八時、九時までには、目を閉じる注射です」と教えてくれました。そのおばあさんも、四台子しだいしの露と消えたはずです。途中ほんのいつとき汽車に乗つたり、歩いたり山また山で大雨に遭いました。背中の子はガタガタ震えています。「母ちゃん、寒い寒い」「母ちゃんもきついのよ」「母ちゃんもきついの？」泣かずに我慢する背中の子です。京頭の山の上に来たとき、同じ鹿兒島の奥さんが亡くなりました。谷底へ転び落ちたのです。山のふもとで小休止のとき「これはソマの粉よ」、私にも分けてくださった奥さん、やさしい奥さんでしたが今も忘れられま

せん。一緒に出発した病弱の御主人は、杖をたよりに三人の子を前後に、はるかな眼下の細道を歩いていきます。遠くの峰には、虹の橋がかかっています。「山下さーん」叫んでみました。こだまが聞こえます。雨が一段と強くなりました。背中の子は、「母ちゃん寒い寒い」歯ぎしりしています。「この子、息していませんか」「大丈夫、私とこの子は」お互いのあいさつは、ただその一言です。黙々と歯をくいしばり泥道を歩く、長く苦しい引揚げの道です。途中歩けない人は注射で殺され、荷馬車いっぱいになると、どこかへ捨てに行っていました。今、息絶えたある奥さんがつぶやいています。「奥さん死んだ方がましですわ」かほそい声で言っていました。その人にはまだ御主人がいました。女の子をおんぶして翌朝暗いうちから歩き出しました。亡き妻の屍はそのまま残して。ゴザ一枚かけて、手足は見えたまま、哀れな引揚げ難民の姿です。山の峠へさしかかりました。輝男は微熱があるようです。私も四〇度の熱、その体で我が子を看取らねばなりません。水をやりたくとも水がないのです。周りを見渡

すとせせらぎが流れています。そこらの木の葉を取って水をやりました。「せせらぎの水をくみきてやみし子の渴をいやせし京頭の山」歌にもなっていないものが、ふつと頭をよぎりました。

ある小さい村でした。向こうから鈍、鎌シヤを手に持ち、徒党を組んでくる村人がやってきました。あれを脱げ、これもと目ほしい物、毛糸のじゅばんなど、大事に身につけていた物も取られてしまいました。敗戦国民の悲しさ、ただ相手のなすがままでした。こんなことがたしか三度ありました。やつと錦州へ着きました。私は、あの乃木大将の「錦州城外斜陽に立つ」を思い出しました。しつかり者の引率者へ聞いてみました。「乃木大将のあの錦州ですか」「いいえ、あの錦州とは違います」そこからそう遠くない所でした。有名な炭鉱がありました。コロ島近くへきています。

いよいよ着きました。コロ島です。ここから続く日本への道です。嬉しくて合掌しました。背中の子をどうにかして、助けたいのです。あれだけかわいがっていた主人のことを、思いました。生きているのか、死

んでいるのか、探しようもないのです。船に乗りました。ブイエッチ号、これはアメリカの借り船でした。

甲板上ではアメリカ水兵と日本の看護婦が、仲良くボール遊びの最中です、よかった、これでいいんだ。私は喜び、ほっと安心しました。私は大事にしていた写真を輝男に見せました。今のうちに父さんに会わせようと思つて。「輝男ちゃんこれはだれ?」「父ちゃん、これは母ちゃん」と喜んでくれました。「日本が見えた!日本が」だれかが叫びました。幾度か夢に見た日本です。つらい悲しい引揚げの道、今故国へ帰つてきたのです。病める子をおぶつて私は神仏に祈りました。「私の命はどうなつてもいいのです。子供を助けてください」。

途中、福岡国立病院へ二、三日お世話になりました。病院の裏に小さい三角畑があり、そこへじゃが芋を植えてあるのです。輝男の大好きなじゃが芋を食べさせてやりたいのですが、上品な人の良さそうなおばあさんは、売ってくれません。私はついにどろぼうをしました。そしてお金の二十銭だか三十銭を、紙に包んで

竹ぎれを立て、「かんにんしてください」と書いてくくつておきました。早速持ち返つたじゃが芋を、輝男に煮てやりました。でも首を横にふります。まるで見ていたようにいやいやをするのです。私はびつくりしました。ほかでようやく分けてもらったじゃが芋は、喜んで食べてくれました。私がどろぼうしたじゃが芋、今も忘れられません。

満州を出発して二カ月余り、いよいよ故郷鹿児島です。汽車の窓から幾度も夢に見た桜島が見えます。「国破れて山河あり」と、故郷の山は残っていたのです。敗戦の満州で苦しいとき悲しいとき、夢にえがいた桜島が今ここに、夢じゃないのです。私は何度か目をこすつてみました。現実に私の目の前にある桜島、ああ故郷へ、故国日本へ帰つてきたのです。昭和二十一年の鹿児島市は、まだ廃墟の町でした。ようやく着いた伊敷の陸軍病院、電報の知らせで七十五歳の母が迎えに来ていてくれました。もうすっかり安心したのか眠くて眠くて我慢できません。うつらうつらの私を母が、揺り起こしてくれました。「お前、この子はや

っせんか、こらおヒナ、おヒナ起きらんか、こら」我が子の傍らに寝ながら、臨終に間に合わなかったのです。はや事切れている我が子の口から、少々泡みみたいなものが出ていました。「ああよかった。もうこれ以上苦しまずにすむ」、不思議に涙が一滴も出ませんでした。昭和二十一年十一月十七日、輝男はついに息を引き取りました。私にはたった一人、一粒の宝石でした。この子亡くして、これからの世の中をどうして生きていけよう、主人戦死は覚悟の前、でもこの子だけ生きていてもらいたかった。

私も熱が下がらず、微熱から高熱は二十日間も続いていましたが、やっと帰ってきた、母の家です。大島より疎開した母の妹が、いそいそと手伝っていました。嘆き悲しんでいるところへ、母が赤いきれいなたすきを持ってきました。「これはね、おヒナ、ここの吹上浜から行った特攻の人らが掛けた、虹のたすきだよ」だれにももらった虹のたすきだったのでしよう。七十五歳の母は、慣れぬ体に飛行場建設の砂運びに通ったそうです。明日は出撃という夜、最後に寝たふとんは涙

でぬれていたと、母は思い出しては語っていました。そうだ悲しいのは、私一人じゃない、日本中にはたった一人の息子を国に捧げた親はいくらもある。辛くとも悲しくとも思い直さねばならない。

終戦、満州引揚げ、子供の死、天びん棒かついで魚の行商、ミシン編み機のセールス、あれも、これも精一杯生き続けました。私は車に乗れても、自転車に乗れないのです。早速自転車の練習です、どうか自信がついて、それでもよろよろと危いことです。なるたけ早く買い終えて、先の村へ急がねばなりません。よし負けるものか、これでも私は小さいころマラソンの選手、でも天びん棒はうまくいきません。一番に走り出した浜辺でも、この道一すじのベテラン級に追い越されます。ついには一番ビリです。歯をくいしばり、涙ぼろぼろ出して頑張りました。「アッ危い」浜辺の松原続きの道、自転車もろとも引っくり返り、魚は砂だらけ、そんなとき、主人を思い涙を流しながら、一匹、二匹、ていねいに砂を落として箱に並べるのです。こんな生活にも慣れたころ、昔のタクシー時代の友達

からの手紙です。「もう一ぺんやる気はありませんか」私は小躍りしました。好きなこの道です。再びハンドル握る五十のばあさんタクシーでした。思えば昭和十二、二年のあのころ、支那事変、満州事変の真只中、連日軍靴の間こえるころでした。敗戦の今、世の中はすっかり変わりました。寂しいとき、悲しいとき、車に乗りながら、私は独り思うことを書き続けました。おしゃべり好きの私のつたない文を、郷土の新聞、南日本の夕刊「思うこと」に載せてもらったのです。浅学ゆえのちぐはぐな文、でも私は思うことを忘れられないことを精一杯書きました。夜おそく疲れて帰っても、ちつとも苦にならないのです。

「あら生きていらしたの」私は背の高い夫をじっと見上げました。「死んだなんてそりや夢だよ、こうしてピンピンしているじゃないか」。変に生々しい声と共に、夫は私のふしくれだった手を、そっと握ろうとするのです。私は思わず手の甲を裏返して、少しでもきれいな手を見せようと思いました。でも夢と分かっているのです。だからこそ、なおその夢に愛想をつかさ

れまいと、必死でした。別れて三十一年、ほんのひとときの逢瀬、でも嬉しかったのです。こんな夢を金で買えるものなら、夜ごと枕辺に金包みを置くことでしよう。夢からさめた時の空しさを、夜のしじまが一段ときわ立たせませす。私は戦争未亡人、終戦もあとわずかという昭和二十年五月、満州のアカシア並木をあとに、夫はふり返りふり返り戦場へ発って行きました。

あの日の面影は私の臉に焼きつき、いまだに年を取ってくれません。時折その面影に、白髪をつけてみたり、しわ数をふやしたり、少し肩を落とさせ前かがみと願うのですが、意に沿ってくれません。あの日を限りに私のささやかな幸せは、吹き飛んだのです。たった一人の子供も三歳で、父のいる彼岸へ渡ってしまいました。天涯孤独の女は、はや八十路のばあさんになり、白髪もちらほらしています。でも元気を出して、今日もハンドルを握っています。お客を降ろして人のいな

いとき、ふと思いの歌を口ずさむことがあります。「ああ あの顔であの声で…」するとどこからか、夫が見ているよう、「おい、けがするなよ」「はい」二

つの受け答えを心でする習慣も、すっかり身につきました。私は戦争の文字を見るのも聞くのも憎みます。たとえそれがよその国のことであっても。

今は亡き母がいつも言っていました。「人間は死ぬと蝶々になるものだそうな」いつの日にどこで聞いた話だったのでしようか。昔のおじいさん、おばあさんに教わったのかもしれない。人間が蝶になるなんて、私は不思議に思ったものでした。ところがどうでしょう。その言葉を新聞でみつけたのです。日中復交のとき、南日本新聞に中国のことわざとして、「中国では人間が死ぬれば、その霊は蝶々になる」と、書いてあるのを読んでびっくりしました。日本と中国とは、ずっと昔から交流があり、母がいつも話していたのは、きっと中国から伝わってきた生きた言葉だったのでしよう。父亡きあと、苦勞して七人の子供を育てた母が九十歳を迎えたときのことです。ある日、車の中で白と黄色の二匹の蝶が仲良く舞っていました。そこらに畑などない鹿児島市の街中のことゆえ不思議に思い、自分の目を疑ったほどです。私はとっさに郷里の母のこ

とが頭をよぎり、今度母が病気で寝込んでしまつたら、再起できないのじゃないかと思つたのです。確かにそのとおりでした。仕事を休んで精一杯の看護も空しく、とうとう駄目だったので。危篤の母に「いつまでも、けがせんように見守つてね」と言うとき、苦しい息の下から母は、「おうおう」とうなづきました。いつまでも悲しみにくれているわけにいきません。気を取り直して、出社して車に乗りましたが、どこからともなく、白い小さな蝶が車に舞い込んできたのです。蝶の訪れは、私の身辺に毎日続きました。「あら母さん、今日も来たの」蝶にささやきかけると、ありし日の母の面影が浮かび、優しくあつた母さん、時には厳しく、そして母のさす声がかえってくるのです。「体に気をつけて、ハンドルさばきはしつかりね」、その母も亡くなつて二十年過ぎました。今では蝶の訪れも途絶えましたが、自分の好きだった中国のことわざのように、蝶になつて生まれ変わった母は、どこかで羽を休めてきつと私たちを見守つてくれているに違いありません。

夫の消息が分かりました。ソ連軍が侵攻してきた二

十年八月九日でした。まだ応召したばかりの夫は、敵偵察に選ばれての戦死でした。暑い真つ盛り、水も欲しかったでしょう。夫戦死の牡丹江省、ムーリン小豆山を思い出します。先日、生き残りの戦友が慰霊のために、彼の地へ行きました。一度は生きたい小豆山でしたが、残念ながらあきらめました。八十三歳にもなったら、体がいうことをきかないのです。皆さんと一緒に行動できないのじゃないか、御迷惑になつたらいけないと、あきらめました。亡き主人が眠る小豆山はどこなところでしょうか。人の背丈ほどのカヤが繁っているのじゃないでしょうか。「行けなくてごめんね。かんにんして」独り心で、祈ることでした。

【執筆者の横顔】

松元ヒナさんは鹿児島県加世田市で明治四十五年生まれの八十三歳である。主人はたばこ専売公社職員でアヘンの取締役も兼務していた。昭和十四年に渡満して家庭をもった。

満州の生活は当時平和で何の苦勞なしで安穩に暮ら

していたが、昭和二十年五月に主人は召集令状をうけて出征して生き別れとなつてしまった。便りによればフィリッピンに出発するとの知らせがあつた後は全く梨のつぶてである。ヒナさんは最後の主人が出征した日から毎日神社に主人の無事平安と必勝祈願のお参りが続いた。

突如、昭和二十年八月十五日の放送を聞くや、号泣するのみ、たちまちソ連軍、八路軍の侵攻にあい、日本は負けたのだ、日本の国はなくなつたのだと罵声をあげせられた。

満人の暴動にあつて持ちものすべて盗まれて無一物、着のみ着のまままで鍋一つ持つての明けかれて逃げまわる連日であつた。路上では八路軍の人民裁判が始まる。略奪三度あつて何もなくなつてしまつた。歩けなくなつた避難民を注射で殺すこともあつた。ようやくコロ島についたが、一粒種の子供輝男を生かしたい一念が通じ運よく二十一年十一月鹿児島にたどりついたが古里は廢墟の町ようになっていた。十一月十七日に一粒の宝石だつた輝男君が死んだ。主人の戦死、たつた

一人の息子の病死。全く天涯孤独になったヒナさんは、タクシーの運転士となってハンドルを握った。今も母を敬い夫を愛し子を慈しむヒナさんは主人の遺族扶助をうけて生活している引揚者の老母である。

(社)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助